HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	八木宏典, 李哉泫編著『変貌する水田農業の課題』(日本経済評論社, 2019年)
Author(s)	小松, 知未
Citation	フロンティア農業経済研究, 24(1), 45-47
Issue Date	2021-11-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90254
Type	other
File Information	24(1)_05_Komatu.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〔フロンティア農業経済研究　第24巻第１号　2021.11〕

書　　評

八木宏典・李哉泫 編著
『変貌する水田農業の課題』

（日本経済評論社、2019年）

北海道大学
小松　知未

本書は、「わが国水田農業のドラスチックな動きを対象に、農業センサスの組換え集計や農業経営動向統計、そして各地の綿密な実態調査データなどを使って、水田農業の構造変化の特徴、飼料イネの導入など水田活用の現状と課題、海外の稲作をめぐる最近の動向、水田農業の将来予測と技術開発の展望、そして今後の諸問題などについてまとめた研究の成果」（pp.3）を取りまとめた書籍である。

「はしがき」によると、研究グループのベースは(公財)日本農業研究所において開催された「水田農業のあり方に関する研究会」(2015～2018年)にある。本書では、研究会による報告書「21世紀水田農業の変貌と課題」を土台に、執筆者が各章を磨き上げた新しい原稿が収録されているとのことである。

本書における構成・各章のタイトル・分担執筆者を紹介する。序章では、編著者である八木宏典・李哉泫が、問題の所在と背景、本書の構成と各章の要約（pp.3～5）を提示している。

第Ⅰ部変貌する水田農業の現局面は、『統計分析編』３章分、『事例分析編』２章分で構成されている。『統計分析編』は、第１章水田農業における組織経営体の構造変化－2015年センサスによる水田農業構造分析－（鈴村源太郎)、第２章水田作経営の経営収支をめぐる諸問題－営農類型別経営統計の分析－（八木宏典)、第３章企業形態別・規模別にみた大規模経営の特徴－2015年農林業センサスの分析－（八木宏典・安武正史）である。

『事例分析編』は、第４章我が国農業における活力創造施策の課題－水田農業経営における飼料用米導入及び規模拡大過程に着目して－（内山智裕)、第５章水田活用の直接支払がもたらした水田利用構造の変化－鹿児島県・Ｋ地区にみるWCS稲の展開を中心に－（李哉泫）である。

第Ⅱ部世界の水田農業の諸相は全４章（４カ国）で構成されている。各章のタイトルは、第６章カリフォルニアにおける水稲作経営の展望（八木洋憲)、第７章イタリア水稲生産の省力化の背景とその方法（笹原和哉)、第８章韓国における水田農業の現状と課題－米の需給状況と稲作農家の動向－（李哉泫)、第９章中国における食糧政策の変遷と米生産の動向（劉徳娟）である。

第Ⅲ部21世紀水田農業の将来像と課題では、第10章米市場の変化からみた水田農業の将来像と技術開発課題（宮武恭一)、第11章マルコフモデルによる農業経営の将来像（安武正史）において、将来像および技術開発課題が検討されている。最終章である第12章水田農業のあり方をめぐる諸問題（八木宏典）では、「水田農業の現局面と将来予測に関する分析を踏まえ、わが国農業をめぐるいくつかの課題について考察」（pp.5）がなされている。

以上の構成と最終章を踏まえた上で、評者がおもう本書の特徴について３点まとめる。ここでは、各章の内容に触れつつ本書のアプローチの特徴を整理した上で、それに対する評者の受け止めを記述することとする。

第一に、『水稲単作的な農業』の実態解明を基軸に、水田農業の課題を検討している点である。営農類型別経営統計を分析している第２章では、

水田作経営について個別経営・組織法人経営の現況を概観した上で、組織経営（稲作単一経営：稲作部門）について規模別に詳細を分析し、2007年から2016年までの10ヶ年間で『水稲』収益性がどう変化してきたのかを詳細に確認している。

『事例分析編』では、東海地域を事例に稲作経営のコスト削減の阻害要因（第４章）、秋田県ＪＡかづのを事例に飼料用米生産行動の変化（第４章）、鹿児島県を事例にWCS稲の展開（第５章）が分析されている。現行の米政策上では「新規需要米」、生産調整開始からの連続性でいうと『水張り転作』と表現されてきた経営対応を中心に、その新展開を示している。作目としての分析対象はあくまで『水稲』であり、『水稲単作的な農業』の現況を把握し、それを基軸に、水田農業の課題に迫るというアプローチが選択されている。

第Ⅱ部世界の水田農業の諸相では、カリフォルニアの水稲作経営（第６章）、イタリアの水稲生産（第７章）、韓国の米の需給および稲作農家の動向（第８章）、中国の米政策と大規模稲作経営（第９章）の事例研究が報告されている。いずれの章でも、「稲作を中心とする最近の水田農業の動向」（pp.4）が分析されている。

評者としては、「変貌する水田農業の課題」というタイトルから、昨今の米価低迷・水稲収益性の悪化を背景に、土地利用・機械装備・収益性（交付金込み）いずれの面でも畑作物・園芸作物のウエイトが高まる傾向が真っ先に思い浮かび、『水田利活用の多様化』に関連する研究課題が連想された。『水稲単作的な農業』を基軸とした本書の構成に、違和感のない読者も多いのかもしれないが、評者としては、2015年頃を現局面とした中にあっても、あくまで『水稲』を基軸としたアプローチ方法を用いている点が、本書の大きな特徴のように感じられた次第である。

本書の発行は2019年だが、翌2020年に公表された食料・農業・農村基本計画（2020年３月）の付帯資料「農業経営の展望」の中では、水田作農業経営モデルの一つとして『大規模雇用型法人・水稲単作モデル（経営耕地200ha、主食用米150ha、輸出用米50ha）』が設定された。政策目標としても『水稲単作的な農業』の経営展開が選択肢の一つになった現局面において、『水稲』に関する研究成果を集中的に学べる本書の意義は、非常に大きいと思われる。

第二に、水田農業の“変貌する課題”として、水稲の低コスト化に重点が置かれている点である。第10章では、米市場の変化を概観した上で、「業務用米市場において、SBS米や古米と競争しつつ市場開拓を進めるには、販売価格9,900円/玄米60kg、農家段階の生産費7,790円/玄米60kgといった極めて低いコスト水準が目標となる」（pp.248）と結論づけられている。国際比較においては、米生産費が我が国に比して大幅に低い地域を対象に、外部化（第６章カリフォルニア）、省力化（第７章イタリア）の態様が記されており、我が国と比較して生産基盤および米生産コスト構造のどこが異なるのかが、読者と共有されている。

総合的考察にあたる第12章では、「国民経済の状況を考えれば、米や麦・大豆などは生産性を向上させ、少しでも低コスト化をはかる努力をすることが、国民の理解を得る上でも重要」（pp.301）と強調している。低コスト化への努力については、経営主体の創意工夫に加え、土地基盤整備事業における「コストを極力抑えた事業の工夫が必要不可欠」（pp.289）、技術開発における「個々の部分技術が常に低コスト化を指向しているのかどうかのチェックも重要」（pp.302）との指摘がある。同章では、良食味米生産、付加価値増大への取組みや課題などについて幅広く考察されているが、低コスト化への課題の検討に主眼が置かれているという印象をもった。

第三に、我が国の水田農業の展開方向として一定程度の規模拡大が必須との見解を示しつつも、

それを担う農業経営主体の性格については、「地域の農業者たちの創意工夫の態様」（pp.285）を捉えることに留め、パターン化を指向していない点が特徴的である。

水田作経営と水田農業構造の将来方向として、最終章（第12章）では、「水田作を独立して維持していくためには、それが家族経営であれ組織経営であれ、少なくとも10ha以上の規模に農地を集積することが、さらに、米価の変動に対して経営を安定して維持していくためには最低20ha以上の規模を確保することが必要になる」（pp.295）と提起している。

この経営規模の想定にストレートに対応しているのが、第３章の2015年農林業センサス分析である。ここでは、「10ha以上（評者補足：水田面積）の階層にしぼり、農林業センサス個票の組み換え集計を通じて、企業形態別・水田面積規模別にみたこれらの経営体の特徴を明らかに」（pp.64）している。分析においては、家族経営体２区分（非法人・法人）、組織経営体４区分（非法人、法人格別）の企業形態別６区分と、水田面積階層区分をクロスさせて、区分別に特徴を整理することで、家族経営と組織経営それぞれで、ビジネスサイズの拡大（販売金額・複合化・多角化）や常雇導入を行う経営が、少数ながら出現している現状を示している。

組織経営の現状把握に注力しているのが、第１章と第２章である。第１章では、2015年センサスと集落営農実態調査とのマッチング接続データをもとに、「個別経営の組織化の動きと集落営農組織の動向を峻別して水田農業における両者の“役割分担”の現状を解析」している。第２章では、営農類型別経営統計を用いて、水田作経営（個別・組織別）を分析しているが、特に組織経営を抽出し規模別・部門別の詳細な分析を行っている。

本書では全体を通じて、経営形態に関する発展段階論的な把握、類型化を行わず（統計区分を概ねそのまま利用しており独自の呼称を強調していない）、水田農業の展開方向に関するパターン化を指向しないアプローチをとっている。評者も含めて水田作経営の多様な展開に関する事例研究を行う研究者にとっては、水田農業の構造変化に立ち返り、各自の研究対象の位置づけを再確認するための共通の書籍となっているといえる。

本書は、我が国の水田農業の展望を考える上で、多くの示唆に富む良書である。水田農業に関心を寄せる多くの方々に一読をお薦めしたい。